

野上弥生子と西欧

榎本義子

野上弥生子は大変な読書家で、和漢のみならず、広く西欧の文学にも通じていたことで知られている。読書から得た教養は、彼女の創作にも影響を与えている。『海神丸』はダンテの『神曲』の「ウゴリーノ伯爵が子供まで食べるおそろしい物語」に触発されて、『利休と秀吉』はポーランドの作家シェンキヴィチの『クオヴァデイス』の中の「ネロとペトロニウスの政治家対芸術家という対立関係が、秀吉と利休のイメージに結びついて」生まれたという。⁽²⁾ また、『真知子』はジェイン・オースティンの『高慢と偏見』を下敷にして書かれたと思われる。さらに、弥生子は『ギリシャ・ローマ神話』をはじめとして、女性初の大学教授である十九世紀末のロシアの数学者ソーニャ・コヴァレフスカヤの伝記、チャールズ・ラムの『沙翁物語』、オースティンの『高慢と偏見』を基にした『虹の花』など、数多くの翻訳や翻案を手がけている。こうした翻訳に必要な語学力の基礎や、西欧文化に対する関心は、どこで築かれ、どのように育てられたのだろうか。また、どのような外国の作品が、若い弥生子に強い感銘を与え、後の彼女の創作にも影響を与えたのだろうか。

弥生子は明治三十三年に十五歳で故郷の大分県の城下町臼杵から上京し、当時巢鴨の庚申塚にあった巖本善治の主

宰する明治女学校の普通科に入学した。彼女は明治女学校で過した六年間は自分の「一生の傾向に殆んど運命的な影響を与えた」⁽³⁾と述べているが、この「風変りな学校」で得たものが、弥生子の西欧的な教養の原点であった、と言えるのではないだろうか。

弥生子の精神形成上に重要な役割を果たした明治女学校はどのような学校だったのだろうか。明治女学校は弥生子の生まれた年でもある明治十八年に、木村熊二、鑑子夫妻によって創立された。木村熊二は祖母、母、子らを妻に託して、明治三年に森有礼の一行に加わって渡米したが、十三年間のアメリカ生活は、彼に日本における女子教育の必要性を痛感させたようである。彼は「帰朝の後深く我国婦人の教育の欠くるに感ずる所あり」⁽⁴⁾と云って、これを明治女学校創立の動機としている。また、明治五年の妻への手紙には「日本の女は無学二而当地の女とくらべ候へば実に氣の毒の様に存じ候」⁽⁵⁾と書いている。こうした熊二のアメリカでの実感を根底に開設された明治女学校は、キリスト教の信仰に基礎づけられ、英語英文学教育を重視しながらも、当時の外国人宜教師によるミッション・スクールとは違って、日本古来の伝統をふまえ、日本人が主体となった女子教育をめざした。木村から主宰を引き継いだ巖本善治の、神の前では男も女も同等であり、自由な環境の中で女性の可能性を開発しようという教育理念のもとに、星野天知、北村透谷、島崎藤村らの多彩な教師の教えを受けて、明治女学校からは相馬黒光、羽仁もと子、山室機恵子らの先駆者的人材が生み出された。

弥生子が入学した当時は、隆盛期麴町にあった校舎が火事で焼け、学校は巢鴨の奥のくぬぎ林の中に移転していた。弥生子の最後の未完の長編小説『森』は、日本女学院という仮名のもとに登場するこの森の学園を舞台にした小説である。小説中の門も扉もない美しいくぬぎの森林の中に点在する白いコッテジ風の洋館の教室、日本家屋の寄宿舎、勝海舟の寄贈した道場、後に新築された講堂などの「お伽話の学校めいた学園」は、弥生子の回想記の中の明治女学校にぴったりと重り合う。弥生子の分身である小説の主人公菊地加根の体験する日本女学院の学校生活と、弥生子自

身が随筆や対談の中で回想する明治女学校での体験を比較しながら、森の学園が最後で唯一の高等科の卒業生弥生子に与えた影響を、西欧文化とのかかわりを中心に考えてみたい。

まず第一に、弥生子はどのような英語教育を受け、どのような外国の作品に接したのだろうか。小説『森』の中では、満十五歳で九州から上京し、日本女学院に入学した主人公を戸惑わせるのは英語の授業である。小学校に通うかたわら私塾にも通っていた加根は、原典で教えられる十八史略や枕草子はなんとかこなせるが、週に八時間もあるうえに、文法まで英語で教えられる英語の授業には途方に暮れてしまう。故郷で中学校の先生についていたために、ナショナルリーダーの二、三までならどうにか読めるが、アーヴィングやロングフェローなど、それまで名前も知らなかった書物は、彼女にとって「どう潜り抜けたらよいか見当もつかないジャングル」⁽⁶⁾のように思われる。アメリカ版浦島太郎の「リップ・ヴァン・ウィンクル」の話のおもしろさも、戦争で別れた恋人同志が年老いて死ぬ直前に出会う、「エヴァンジェリン」の哀れに美しい恋物語も、辞書にかじりついている加根には、無数の単語とむずかしいイデオムの「妖怪めいた集積」に過ぎない。英語の発音にも彼女は苦しめられる。アメリカ留学から戻ったばかりの玉井品江という教師から、加根はあてられる度に音節の切り方から抑揚までことごとく直され、泣きたくなる。日本女学院では試験はいつさい行われぬが、このことはかえって彼女を不安にする。試験のないのは、毎日、毎時間試験されていると同じだからである。同級にいる二人の留年生のうち一人は、英語の学力が水準に達しなかったために進級できなかったらしい。このことは加根にとってはよそごとではなく、彼女に恐怖感を与える。

しかし、努力家で知的好奇心の強い加根は、遅れた語学力を補うために放課後英語の先生の家に通いながら、勉学に励む。やがて、普通科二年の二学期に故郷から戻る頃には、新学期にどのようなテキストが使われるか想像して、うきうきした気分になるほど、彼女は英語に対する自信をつける。玉井先生はギヤスケル夫人の『クランフォード』と共に、クリステイナ・ロゼッティの詩を新しいテキストに選ぶ。義務づけられた詩の暗誦は加根をいささかうんざ

りさせるが、クリステイナの兄のガブリエルは自分の詩集を結婚したばかりで亡くなった若い妻に捧げて、一度は墓に納めたといった先生の語る純愛物語は、彼女をはじめクラス全員を感動させる。

加根は図書館にある徳富蘇峰の民友社の出版したヨーロッパの有名な人物の伝記シリーズの中にロゼッティを探す、見つからない。しかし、バイロンやシェリーやカーライルを見い出す。高等科になれば『英雄崇拜論』がテキストに使われるので、彼女は真先にカーライルから読み出し、カーライルは子供の頃戸外で御飯を食べるのが好きで、お皿をかかえて庭の生垣に腰掛け、夕暮れの空を眺めながら食事をしたといった話に感心し、羨しく思ったりする。

加根は普通科の生徒であるが、高等科では、シェイクスピアやテニソンなどの文学作品の他に、チンダルやヘルムホルツの論文集がテキストに使われていることが小説中で語られる。

加根が受けた日本女学院の英語教育は、弥生子自身が回想する明治女学校のそれにほぼ一致する。「作家に聴く」の中で、彼女は明治女学校の授業について次のように語っている。

学校が自由だったことは前にも云ったが、教科書はすべて原典でやった。それも英語など文法など碌に教えてくれない。「字引きを引きなさい。一人で読みなさい」だから、コツコツ辞書を引くことだけは覚えた。高等科になると、今考えてみて、わかったかわからないのか知らないが、シェイクスピア、テニソン、エマーソン、カーライルなどを読んだ。^(?)

また、竹西寛子には次のように語っている。

いわゆる教科書なるものは一度も使ったことがなくて、いきなりむつかしい原典を読まされたものなんです。詩はテニソン、ロングフェロー、エマーソンでしょう。同時にチンダルやヘルムホルツの論文集を読ませるといった工合なの。ロシア文学では一番最初に読んだのが『レザレクシオン』（復活）もちろん英文で。赤い羅紗紙のチープ・シリーズに入っていました。サツカレーも読んだしシェイクスピアも教わったけれど身につかないでかすったば

かり。⁽⁸⁾

弥生子は現在の大学の英文科の授業のようなものを明治女学校で受けたわけだが、「むつかしい原典」を読みこなすために必要な英語力を補うために、初めは外国人宜教師の個人教授を受け、やがて同郷人で第一高等学校に在学していた、後に夫となる野上豊一郎の教えを受ける。明治女学校で培われた辞書を片手に原書を読む能力と、西洋文学に対する関心が、後の弥生子の読書習慣の基礎となったことは疑いなくであろう。

辞書を片手に原書を読むという習慣の他に、弥生子は明治女学校でどのようなものを得たのだろうか。弥生子自身は次のように述べている。

私、ほんとにポカンとしていたんですけれども、よその学校で学校生活を送っていたならば、決して今のような私はなになかったと思いますね。とくにものの考え方。それを育ててくれたのはやはりあの学校でしょう。いわゆる精神主義というんでしょうか。そこにウエイトがおかれていたっていうこと。だから社会的な権威とか世間の迷惑とか、習俗形式とかいうことにとらわれないというのではないけれど、かかわりのないようなものの考え方をするようになったってこと。それは私ばかりじゃなく、いわゆる明治女学校風というものなんでしょうね。…それからやはり、「神」というものの概念を知ったってこと、これは大きいですね。超越者というものの存在を考える場合に、仏教よりもクリスト教の神の方が、私には強くうえつけられているというのは、やはり明治女学校の感化でしょう。⁽⁹⁾

形式に捕われないで自由な雰囲気の中で女性の能力を開発するという明治女学校の校風は、『森』の中でも描かれている。神の前では男も女も平等であり、「婦人は女であると共に人間でなければならぬとする理念」⁽¹⁰⁾を根底に持つ日本女学院には、従来女学校には不可欠とされる裁縫や料理はなく、体操のかわりに薙刀、剣術が教えられる。学校には校門も校則もなく、岡野直己校長を崇拜する若い青年達が自由に出入りする。読む力、考える力を重視し、試

験のための知識の暗記を無用とするために、試験は一切行われぬ。こうした風変りな校風に最初は驚きと戸惑いを感しながらも、向学心に燃える加根は、いきいきと学生生活を送る。

主人公のキリスト教に対する戸惑いと親しみも『森』の中で描かれる。加根の故郷は十六世紀に大友宗麟の城のあった城下町で、宗麟はフランシスコ・ザヴィエルによってもたらされたキリスト教をいち早く受け入れ、町では南蛮文化が栄えた。しかし、秀吉のキリスト教禁制後は町は一変し、多くの寺が建てられたが、現在の町の人々は商売第一で、寺は無用なものであり、邪蘇教は「なにか得体の知れぬ怪しげなもの」⁽¹¹⁾に過ぎない。日本女学院で月曜の朝行われる岡野校長の道話は、こうした環境に育った加根をひそかに困惑させる。それは最初に読まれる聖書のためである。全校の集まりはお祈りで始まり、お祈りで終るが、お祈りの最後のアーメンという言葉が彼女の口から自然に出てこない。讃美歌にもまごつく。加根は聖書と讃美歌集を買うが、それは入学のために買い整えられたカシミヤの袴や靴や弁当箱などといひして変らない買物である。

それでも、クリスマスの頃には、加根にもキリスト教が身近な親しいものに感じられるようになり、「故郷でクリスチャンをけつたいな人間扱いにするのは大きな誤りだ」⁽¹²⁾と思うようになる。クリスマスはロマンテックでハイカラなお祭りに想像され、讃美歌にも前より熱心になり、英語の讃美歌集も買い求める。また、彼女は校外からの講演者の様々な話を楽しむに待つようになり、科外講話に頻繁に訪れる内村鑑三を初めて見た時、「怖つかない」顔がカーライルそっくりだと思ったりする。

明治女学校をしばしば訪れる内村鑑一の容貌と講話は、女学生の弥生子に強い印象を与えたようである。「長身で痩せてゐながら、どこか重量感のある骨格で、眼光が、炯々として、下半面が突起し、大きな口と、その上に盛りあがった髻がそれをなほも強調した顔」⁽¹³⁾を、弥生子は一度見たら忘れられない顔と言ひ、カーライルに似ていると随筆の中に何度も書いている。印象に残った内村の講話の一つとして、彼女は次のような話をあげている。外国からの帰

りの船の中で、英国の宣教師が彼に女房自慢の話をした。その奥さんはヘブライ語の聖書が読め、讚美歌は誰よりもうまく歌い、パンを焼くのは村で一番上手だと言った。皆さんもそういう女性になってほしいというものである。内村の話の中の、教養があり総明で、しかも家庭的な女性というイメージは、後年の弥生子自身の姿に重り合うのではないだろうか。

弥生子の精神形成上にきわめて重要な役割を果たした明治女学校への入学には、彼女の故郷の臼杵という土地柄が背景にあるだろう。彼女の言葉を借りれば、臼杵は「今は特長もない小さな田舎の港町」であるが、「大友宗麟の居城があったために、外国の文化がいちはやく入ってきた」ところであり、ポルトガル人がはじめてこの港から日本に上陸して以来、「西欧の文化、とりわけキリシタン布教のための重要な扉となった」⁽¹⁴⁾ところである。この町に始まった日本のキリスト教史に対する弥生子の関心は、彼女の代表作『迷路』の主人公菅野省三が「大友氏の文化史的研究」を研究課題にしていることから窺われる。このように外国文化をいちはやく取り入れた土地の小手川酒造の二代目当主であった弥生子の父角三郎は、政治にも深くかわり、自由党の後援者であった。坂垣退助も地方遊説の折に、小手川家に泊っている。彼女の故郷が先進的で、開放的な土地柄だったからこそ、当時片道四日もかかる東京で、弥生子が学ぶことが許されたのであろう。

また、弥生子の入学には、叔父小手川豊次郎の存在も見のがすことはできないであろう。豊次郎はアメリカのミシガン大学で七年の勉学の後に博士の学位を取り、僭倖という肉体的なハンディキャップをのり越えて、実業界、政界で活躍した。弥生子ははじめ虎の門の女学館に入学する予定で上京したが、彼女の世話を依頼された叔父は、多忙だったために、友人の毎日新聞のキリスト教社会運動家島田三郎に彼女を委ねた。弥生子は島田の勧めで明治女学校に入学することになり、さらに、校長の巖本善治と親しい木下尚江によって、彼女は学校に連れていかれたのである。

弥生子はこの叔父の家から明治女学校に通学しているが、豊次郎は明治女学校への入学だけでなく、弥生子の西欧

との最初の出会いも、もたらしたのではないだろうか。小説『森』の中に平三という名で登場するアメリカ帰りの叔父は、幼い主人公に強烈な印象を与える。「西洋人みたいに際立って白い顔をした」⁽¹⁵⁾ 普通の男性の半分ぐらいしか背丈のない僵僂の叔父に、加根は郷土言葉で「魂が^{たま}った」としか表現できないような衝撃を受ける。彼の食べる奇妙な食物も無気味な印象を強める。彼のお茶がわりに飲む液体は「変などろどろしたもの」で、ちょっと「お汁粉」に似ていて、香りは悪くないが、「漢方薬のせんぷり」のようで苦い。毎朝彼の食べる玉子料理も変っている。それは普通の玉子焼きではなく、東京から持ってきたガラスビン入りのどこか「毛唐人臭い油」を、なるたけ底の浅い鉄鍋を燃して、流し入れ、その上に割った玉子を落して焼くのである。奇妙な外見で、奇妙なものを食べるが、アメリカの大学で学問を修めた平三叔父は、加根にとって「偉い人」であり、「同時に学問をすることまでよくはわからないが、なにか偉いこと⁽¹⁶⁾のよう」に思われる。奇妙で無気味だが、興味ある存在である叔父は、幼い加根、さらに弥生子にとっても、西洋そのものだったのではないだろうか。

アメリカ帰りの叔父を介して入学した明治女学校は、弥生子に「運命的」な影響を与えるが、そこで彼女の得た西欧的教養やものの見方を広げ、深めるのを助けたのは、夫の野上豊一郎とその師夏目漱石であろう。弥生子は結婚した時には作家になろうとは思わなかったが、「何か知識を求めるとか、人間的に成長する⁽¹⁷⁾」ということは続けたかったと語っているが、豊一郎は結婚当初から彼女の「教師」であつたようだ。弥生子は創作のかたわら数々の翻訳を手がけているが、それは英文学者である豊一郎の勧めと助言に基づいて始められたものである。彼女は大正二年七月にエブリマンズ・ライブラリーに入っているトマス・バルフィンチ(Thomas Bulfinch)の『伝説の時代』(The Age of Fable)の翻訳を尚文堂から刊行した。また、英語版のロシアの女性数学者ソーニヤ・コヴァレフスカヤの回想録と、ソーニヤの友人のアン・シャーロット・レフラーによる伝記の一部を翻訳し、雑誌『青踏』に大正三年十月から翌年の二月まで連載している。この最初の二つの翻訳は、弥生子の西欧文化に対する関心の方向をよく示している

と言える。

バルフィンの『伝説の時代』はギリシャ・ローマ神話と共に、北欧及びインドの神話を収め、アーサー王と円卓の騎士の物語がその続編となっている。弥生子は続編の翻訳も『中世騎士物語』という題名で後に出版しているが、この翻訳について彼女は次のように語っている。

：私、西欧的な教養を身につけるとする場合、ギリシャ・ローマ神話、中世の物語、たとえばアーサー王物語なんかですね、それから聖書、こうしたものは、どうしても知っておかなければならないというふうに教えこまれていたものですから、「伝説の時代」は、ちょうどそれになかった、ほどよいものとして訳したわけなんです。ガイド・ブックっていうふうなものですけれども。⁽¹⁸⁾

『伝説の時代』は後に『ギリシャ・ローマ神話』と改題されて岩波文庫に入ったが、この翻訳には、西洋文化を根幹から知ろうとする弥生子の姿勢が見られる。漱石も序文の中で「歐洲文学の根底に横わる二つの宝庫（聖書と希臘神話）⁽¹⁹⁾」の一方を翻訳したことを称えている。

『伝説の時代』を出版した翌年大正三年に書かれた「人形の望」はギリシャ神話を下敷としているだけでなく、弥生子の人生感をも示している。この童話の中には、日本人形玉子、フランス人形エリザ、イタリア人形アンゼラ、英国生れの人形ベルが登場する。ベルは哲学者のギリシャ人形から人間と人形の違いは「靈魂^{たましい}」の有無だという話を聞き、持主の子供は成長するのに、「靈魂」のない自分達人形は成長しないことを悲しく思う。玉子とエリザはベルに共感するが、美しい遊び好きのイタリア人形アンゼラは、若い可愛い子供達を相手にいつまでも若く可愛いままいたい、人形が成長したい、人間のようになりたいと思うのはとんでもない心得違いだ、と言う。しかし、蠟人形のアンゼラは、持主の華子の不注意からストーブの上に落ち、無残に溶けて、蠟の固りになってしまう。

この事件をきっかけに、人形達は人間のように成長したいという望みをつのらせ、三月三日の雛祭の夜にギリシャ

のバルナサス山の洞窟に住むデューカリオン老人のもとに行き、「靈魂」を授けてくれるよう神に頼んでほしいと求める。デューカリオン老人は「靈魂」がなくて身体だけの時には、楽しい事も悦ばしい事も、悲しい事も、ただ身体だけの悦び、身体だけの悲しみ、身体だけの苦しみでいいのだが、「靈魂」を持ってばその上に「靈魂」の悦び、「靈魂」の悲しみ「靈魂」の苦しみが出来て来る。身体ばかりの悦びや楽しみとは比べ物にならない深い悦びや楽しみをする代りに、悲しい事、苦しい事も身体ばかりの苦しみや悲しみのやうな手輕なものではない。それを覚悟してゐなければきっと後悔する。而して先の身体ばかりの時の氣樂な心持ちを懷しがるやうになるのだ」⁽²⁰⁾と三人形に覚悟のほどを確める。

オリンポスの山の上でジュピターから「靈魂」を授けられて大喜びする三人形に、神々は何か一つだけ「力」をお祝いにあげようと言う。フランス人形のエリザは美の女神ヴィーナスから美を、英国生れのベルは知恵の女神ミネルヴァから知恵を貰う。日本人形の玉子は美を貰おうか、知恵を貰おうか迷うが、アンゼラの死を思い出し、「知恵があつたらあんな見苦しい死方はしないで済んだのかも知れぬ。……たゞ「美」だけでは仕方がない。何処までも総明なはつきりした「知恵」が欲しい」⁽²¹⁾とミネルヴァから「知恵の光る玉」を貰う。

この作品には、精神を重んじ、女性も知恵を持ち、絶えず成長するように努力すべきであるという弥生子自身の生き方が表われている。彼女の伝えようとするメッセージは、知恵の女神ミネルヴァの「お前達は「知恵」が欲しくはないかえ。女の子でも男の子でも「知恵」を持たないものほど悲惨なものはない。「知恵」は何よりも尊いものだからね」⁽²²⁾という言葉の中に示されていると言えよう。また、「靈魂」を持って成長したいと願ひ、迷わず知恵を選んだ人形が、英国生れであることも興味深い。

『青踏』に連載されたロシアの数学者ソーニャ・コヴァレフスカの自伝と友人の回想録の翻訳も、知性を持ち、主体的に生きようとした西洋の先駆者的女性に対する弥生子の共感を表わすものと言えよう。大正十三年にこの伝記の

完訳『ソーニヤ、コヴァレフスカヤ』が出版された際に、その序文の中で彼女は次のように語っている。

……この書物は、私が最も深い親しみを寄せてゐる愛読書の一つであり、ソーニヤは長い間の友達であつたので、今この翻訳を世の中に送り出すことは、自分の親友を紹介するやうな悦を感じてゐる。この異常な友達は、今まで私に与えてゐたと同じ親しみと善い刺戟を、今後彼女が出逢ふほどの人々にも与へるであらうことを疑はない。⁽²³⁾

弥生子の心を捕えたソーニヤは、一八五〇年にモスクワで生れた数学者である。將軍で大地主の父を持つ彼女は十三歳の時に姉のアニュータに心を寄せるドストイエフスキーに初恋をしているが、十七歳でロシアの伝統的な親権から解放されて外国に留学するために、ワルデマール・コヴァレフスキーと名義上の結婚をする。ドイツで夫は古生物を、妻は数学を学び、彼女は二十七歳で博士号を得る。学位を得てモスクワ大学に赴任することになった夫に従い、ソーニヤもロシアに戻り、ここで本当の結婚生活が始まり、一人娘が生れる。しかし、幸福な結婚生活は長く続かず、夫が投機的な事業欲に取りつかれ、やがて、自分が詐欺師に欺されていたことがわかったと、彼は自殺してしまう。一人娘をかかえたソーニヤは、ストックホルム大学で数学を教え始め、女性ではじめての大学教授となる。彼女のすぐれた研究業績には、フランスの科学学士院から賞が与えられている。しかし、彼女は単なる知識の探究だけでは満足せず、女性として愛し、愛されることを望み、恋多き女であつたようだが、四十一歳で夭折している。

仕事か愛かに悩み、「女性であると共に卓越した人間であらうとした向上心との間で、常に苦しみ、相克した」⁽²⁴⁾このロシアの女性数学者の生涯は、結婚後も知識を求め、人間的に成長したいと願っていた弥生子の生き方に、大きな影響を与えたのではないだろうか。

ソーニヤ・コヴァレフスカヤの伝記の翻訳に見られるように、二十代の弥生子は、外国の先駆者的な生き方をした女性や、女性作家に興味を持ったようである。こうした弥生子にイギリスの女流作家の作品を紹介したのは夏目漱石である。彼女は明治四十年に漱石の紹介で、「縁」を『ホトトギス』に発表し、小説家としての第一歩を踏み出した

が、夫の豊一郎を介して、漱石から小説の手ほどきを受け始めた頃、「外国の女流作家はいったいどんな作品を書いているのか勉強して見たい興味にとらわれた」⁽²⁵⁾と弥生子は書いている。当時は翻訳はなく、原書も簡単に手に入らない状態だったので、彼女は漱石に何か貸してくれるように頼んだのである。

彼女の望みに応えて、漱石はジェイン・オースティンの『高慢と偏見』、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』、ジョージ・エリオットのものを一冊、それにエドモンド・ゴスと彼女が記憶する絵入りの英文学史を貸し与えた。この時、漱石は「弥生子さんにはブロンテはおもしろくないだろう」と告げたという。ブロンテは「非常に直載で、形容詞とか余計な文章のない大人の文章だから、まだ幼稚な私には、きつとおもしろ味がわからないだろうとお思いになったと思います」⁽²⁶⁾と後年弥生子自身は語っている。ジェイン・オースティンとシャーロット・ブロンテは非常に対照的な作家で、漱石も『文学論』の中で、写実派のオースティンの『分別と多感』(Sense and Sensibility)と対照して、ロマン派の作品の一例としてブロンテの『ジェイン・エア』を取り上げている。

この時弥生子の心を捕えたのは、オースティンの方であった。彼女はオースティンの小説の読後感を後年次のように書いている。

小説は『ジェイン・エア』をまず手はじめに、つづいて『プライド・エンド・プレジューデイス』を読んだ。その時の強い感銘はいまだに忘れない。それは私には一種の開眼であったとともに、また深い失望であった。オースティンは二十三でそれを書いた。ちょうど私も同い年ぐらいであったから、自分のほんの習作のような貧しい短編に思いくらべて、その素晴らしさに打たれるだけそれだけ自信喪失に陥ったのである。しかしそれ以来『プライド・エンド・プレジューデイス』は私の愛読書となった。⁽²⁷⁾

オースティンの作品は『ソーニャ・コヴァレフスカヤ』と共に弥生子の愛読書となっただけでなく、さらに彼女と深いかわりを持つようになる。大正十五年に豊一郎がこの作品を翻訳した際には、進んで筆記や校正を手伝い、自ら

もこの作品を約半分に短縮した翻案『虹の花』を、昭和十年から十一年に『婦人公論』に連載している。さらに、オースティンは彼女の創作にも影響を与えている。

弥生子はオースティンの作品のどんなところに心を引きつけられたのだろうか。「はじめてオースティンを読んだ話」という随筆の中では、その文学的価値について「女流作家の陥りがちな感傷を見事に脱し、平明簡潔で、ユーモアに富み、戯曲的にまで巧みな構成と推移で、登場人物の一人一人がいかにも活き活きと描きだされている」と彼女(28)は語っている。また、大正十五年に豊一郎の翻訳の校正を手伝った時の日記にも、作品の構成の見事さや「あざやかな性格描写」に感嘆し、原文で作品を読み返し、「自分も斯う云ふとりあつかひ方で一つ長いものを書いて見度い」(29)と綴っている。

二年後の昭和三年から五年に『改造』に連載された弥生子の長編小説『真知子』は、構成、人物造型、テーマと様々な点でオースティンの作品に類似している。『高慢と偏見』はイギリスの田舎町を舞台にして、経済的にあまりゆとりのない有閑階級のベネット家の姉妹の結婚、特に次女のエリザベスの結婚問題を通しての自己成長をテーマにした作品である。この小説の主人公エリザベスは、年収一万ポンドのペンバリー荘園の当主フィッツウィリアム・ダーシーから結婚の申し込みを受けるが、高慢な態度を取るダーシーに偏見をいだき、これを断わり、ハンサムな青年将校ジョージ・ウィカムにひかれる。しかし、女性や金銭にだらしないウィカムの実体を知り、また、ダーシーの人間としての誠実さを認識するに至って、彼女はダーシーの二度目の求婚を受け入れる。

社会主義運動が盛んで、しかも一方では封建的な「家」の觀念が根強く残る昭和初期に生き方を模索する若い女性を主人公とする『真知子』は、オースティンの小説の筋立をほぼ忠実に借りている。高級官僚であった父を亡くし、母と二人暮らしをする真知子も、経済的に余裕のない有閑階級に属しており、物語は彼女の結婚問題についてである。真知子は河井財閥の御曹子河井輝彦から求婚されるが、自己の属する階級に対する嫌悪感からこれを断わり、ハンサ

ムな革命家関三郎にひかれていく。しかし、彼女は女性にだらしなく、利己的な関の実体に気づき、また河井の誠実さを認識する。物語は河井の二度目の求婚を真知子が受け入れることを暗示して終る。

『高慢と偏見』と『真知子』の筋立は驚くほど類似しているが、二つの作品はまったく異なった印象を読者に与える。それは一つには、オースティンの作品では、主人公の第一の男性ダーシーに対する気持の変化に重点が置かれているのに対し、弥生子の作品では、主人公の第二の男性関への恋愛感情に重点が置かれているためであろう。また一つには、主人公の性格設定の違いにもよるだろう。エリザベスは快活で、戯れ好きな女性であり、理性的で、一時的な情熱に押し流されることはない。それ故、若さと未経験からダーシーに偏見をいだき、ウイカムの実体を見抜くことができずに好意を持ったが、無謀な恋に深入りすることはなく、自分の誤りに気づくと、愛情と経済的基盤に基づくダーシーとの結婚を選ぶ。彼女は限られた枠の中で、当時女性に与えられた唯一の選択の機会である夫選びの際に、最大限に個性を発揮して幸福を掴み取っていく。これに対して、真知子は内省的で感情の揺れ動きの激しい女性である。彼女は社会問題に目覚め、自己の属する階級を批判し、そこから脱出する方法を思案する。彼女は革命家関との恋に賭け、それによって自己変革を遂げようとする。だが、作者の弥生子は彼女に自分の誤りに気づかせ、エリザベスと同じように現実に根ざした愛情と結婚を選ばせている。

『真知子』は筋立やテーマだけでなく、人物造型の点でも『高慢と偏見』の影響を受けている。娘の結婚を焦る母親、富や夫の社会的地位を鼻にかける俗物根性の固りのような女性達、女性にだらしない美貌の青年など、二つの作品には類似した人物が数多く登場するが、なかでも娘ばかりのベネット家の財産の法定相続人の田舎牧師コリンズと、真知子の姉の夫で地方の旧制高校の教師で生徒主事の山瀬の類似は際立っている。丸善で洋書を買うことを楽しみとし、知識をひけらかすおしゃべりな山瀬に「うぬぼれ屋で、尊大ぶっていて、偏狭で、愚かな男⁽³⁰⁾」というエリザベスのコリンズ評はそのままあてはまる。富や権力の追従者で、まがいものの知識人は、両作品の中で、滑稽な人物とし

て、風刺をこめて生き生きと描かれている。

コリンズ風の人物は、昭和二十一年に書かれた短編「転生」の中にも登場する。修学院の英語教師の小島には、「オースティンの傑作に出て来る俗物の、長談義の、貴族崇拜の、くそまじめなだけ我慢できない、若い田舎牧師」に似ているために、「ミスタ・コリンズ」という渾名がつけられている。「貴族に対する奴隷じみた崇拜」⁽³²⁾を持つ小島は、名門の子弟を教えることを有難がり、自慢しているが、戦争中に英語学者としての知識をひけらかすために日英の皇室を比較し、隣組のいがみ合いから不敬罪で起訴され、失業して闇屋となる。やがて戦争が終ると同時に、彼は天皇制を批判する民主主義者に「転生」する。物語には、彼の講演会を一度も欠かさない聴講者は、会場に暖を求めてやって来るクラブの留守番の俄かつんぽのおばあさんであったという辛辣な結末がついている。

このように弥生子は、若い時代に出会ったオースティンの小説から様々な影響を受けているが、それは人間の理性を基盤とする良識や中庸を良しとし、節操のない軽薄な人間や俗物根性を笑うオースティン流のものの見方や、写実的な手法が弥生子の資質に合ったからではないだろうか。

弥生子は明治、大正、昭和という三つの時代を生き、創作意欲も西欧文化に対する関心と探求心も、生涯衰えることがなかったようである。『森』を執筆していた九十五歳の時に雑誌『海』に掲載された谷川俊太郎との対談の中で、仕事を中断したことはないかという問いに、「ないの。書かなければ、語学の勉強したり、自分が知らないものをメチャクチャに読んだりしました」⁽³³⁾と彼女は語っている。この当時も、テレビやラジオ講座で、フランス語やスペイン語の勉強をしていたようである。明治女学校で培われ、豊一郎や漱石の助けを借りて育てられた西欧的教養は、これも少女時代から身につけられた和漢の素養と共に、弥生子の生き方や創作に影響を与え続けたと言えるだろう。

- (注)
- (1) 野上彌生子「海神丸」(『野上彌生子全集第二十二卷』一九八二年、岩波書店)二二六頁。
 - (2) 野上彌生子「あれも、これも書きたい」(『野上彌生子全集別巻二』一九八二年、岩波書店)一五五頁。
 - (3) 野上彌生子「その頃の思ひ出」(『野上彌生子全集第十九巻』一九八一年、岩波書店)四六九頁。
 - (4) 青山なを『明治女学校の研究』(昭和四十五年、慶応通信)四三五頁。
 - (5) 同書、四三五頁。
 - (6) 野上彌生子『森』(昭和六十一年、新潮社)一九頁。
 - (7) 野上彌生子「作家に聴く」(『野上彌生子全集第二十一巻』一九八一年、岩波書店)三八三頁。
 - (8) 野上彌生子「聞書竹西寛子」「妻と母と作家の統一に生きた人生」(『野上彌生子別巻二』一九八二年、岩波書店)一二四頁。
 - (9) 同書、一二七頁。
 - (10) 野上彌生子『森』一九頁。
 - (11) 同書、二六頁。
 - (12) 同書、八七頁。
 - (13) 野上彌生子「私が女学生時代に見た内村さん」(『野上彌生子全集第二十一巻』一九八一年、岩波書店)四二二頁。
 - (14) 野上彌生子「ふるさと断章」(『野上彌生子全集第十九巻』一九八一年、岩波書店)四〇九頁。
 - (15) 野上彌生子『森』二八一頁。
 - (16) 同書、二八三頁。
 - (17) 野上彌生子「妻と母と作家の統一に生きた人生」一二九頁。
 - (18) 野上彌生子「対談竹西寛子」「女性と文学」(『野上彌生子全集別巻二』一九八二年、岩波書店)九四頁。
 - (19) 夏目漱石『傳説の時代』序(『漱石全集第二十一巻』昭和三十二年、岩波書店)二五七頁。
 - (20) 野上彌生子「人形の望」(『野上彌生子全集別巻二』一九八二年、岩波書店)一〇〇頁。
 - (21) 同書、一一三頁。
 - (22) 同書、一一一頁。

- (23) 野上彌生子『ソニーヤ・コヴァレフスカヤ』序（『野上彌生子全集第二期第十八卷翻訳Ⅰ』一九八七年、岩波書店）六頁。
- (24) 同書、六六頁。
- (25) 野上彌生子「はじめてオースティンを読んだ話」（『野上彌生子全集第二十二卷』一九八二年、岩波書店）三六一頁。
- (26) 野上彌生子「妻と母と作家の統一に生きた人生」一三〇頁。
- (27) 野上彌生子「はじめてオースティンを読んだ話」三六二頁。
- (28) 同書、三六二頁。
- (29) 野上彌生子『野上彌生子全集第二期第一巻日記Ⅰ』（一九八六年、岩波書店）三一二頁。
- (30) Jane Austen, *Pride and Prejudice* ed. Donald J. Gray (Norton Critical Edition), p. 94.
- (31) 野上彌生子「転生」（『野上彌生子全集第十二巻』一九八二年、岩波書店）七八頁。
- (32) 同書、一〇二頁。
- (33) 野上彌生子「対談谷川俊太郎」「昔の話、今の話」（『海』一九八一年一月号、中央公論社）一八四頁。

（追記）

本稿は日本比較文学会創立四十周年記念第五回公開講演会（一九九一年六月十五日、日本大学法学部）の草稿に補筆したものである。